

# 異文化交流のまちへ 開港の歴史を繋ぐ

## 日本人の異文化交流の不足

国際化に関しては、私たちの意識面の改革が求められている。私たちは、より一層国際感覚を身につけ、国際理解を広げなければならない。現在、外国情報はふんだんにあり、外国へ出かける日本人も多く、日本へやってくる外国人も多い。しかし、海に開かれた日本は隣国と接していないため、簡単に国際コミュニケーションをとることができない。それによって他国に比べ異文化交流が充実していき、日本には独自の文化が存在している。日本の文化の良さを改めて知ると共に、異文化を理解した上での交流をするためにも、普段から異文化に触れる機会が必要である。

## 静岡県下田市

下田市は静岡県の伊豆半島の南部に位置し、太平洋に接している港町である。幕末のペリー来航による開港の舞台となった歴史文化、風光明媚で過ごしやすい気候風土など、本市固有の自然・歴史・生活文化・産業等の地域特性を有している。地球規模での環境に関する意識の高まりの中で、本市には「富士箱根国立公園」をはじめとする美しい海岸線など、海と森の豊かな自然環境が存在する。

現在の下田はというと、年間500万人の観光客を有する観光地である。産業面では、国際的な競争の中での「開港のまち・下田」の基幹産業である観光業の生き残りが課題となっている。しかし、その観光客も近年は減少傾向にあり、市内の生活面においても高齢化や過疎化が目立ってきている。下田市としても歴史文化・地域特性を積極的に活用して、「国際性豊かな生活創造都市」づくりへの貢献が期待されている。



## 開港の歴史

1853年、米国提督ペリーが軍艦四隻、ミシシッピ、サラトガ、サスケハナ、プリマスを率いて浦賀に来航し開港を求め、翌、1854年横浜で日米和親条約が調印され、下田、函館が開港されることになった。そのうち下田は即時開港された。その後ペリーは七隻の軍艦を率いて下田に来航し、了仙寺において下田条約を調印。その他にも、ロシアからプチャーチンが来航して日露和親条約が締結された。さらにハリスが総領事として着任する。日本の外交の教養に登場した下田は、世界史にその名を刻むこととなる。

そして、下田は1988年に、その出生地でもあるアメリカのロードアイランド州のニューポート市と姉妹都市提携がなされた。開港80周年の1934年から世界平和と国際親善を誓うための記念行事として、毎年黒船祭を行っている。

## 提案

「国際性豊かな生活創造都市」ということを考えたとき、まず、下田は日本ではじめて開港し、外国人を受け入れたという歴史が思い浮かぶ。歴史的にも開港のさきがけとなった下田こそ、国際化の時代である今日に外国人を導き入れて受け入れ、国際交流や国際的なコミュニケーション能力を養うための地域として発展していくことが求められると考える。そこで、姉妹都市であるニューポートとの国際交流の活性化を行う。実際に現在は、スポーツの親善試合や市内の高校などで交換留学生のホームステイなどの交流を行っているが、多くの市民は交流に関しての機会はありません。ただ開港の歴史を知っているだけである。もっと異国の人や文化に触れる機会を増やすことで、下田の新たな国際化の文化を創出し、市民の生活に誇りや意義の向上を目指す。その歴史文化や恵まれた気候風土の中で、これからの時代を支えていく国際的な能力を育成し地域の活性化へとつながるコミュニティを提案する。



異文化交流の必要性  
 下田市の歴史を生かしたコミュニティの形成  
 市民の国際化への意識の向上  
 交流の定着化  
 国際性豊かな創造都市へ

## 歩行者ネットワークの形成



観光のコースとして、下田駅から市街地への流れと、国道135号線から遊覧船「開港記念」へ誘導が図られて存在していた。



遊覧船サスケハナに注目して、実際にペリーが来航した場所にも発着所を設ける。それによって、道の駅と市街地をつなぐ新たな道が形成される。

## 401726 Takashi Tsuchiya No, 1



新たな発着所が、下田駅、道の駅をつなぐ歩行者ネットワークが完成される。

## 建築計画

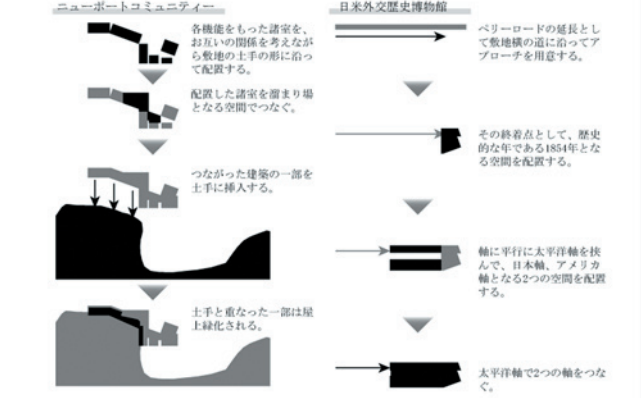
異文化交流を行うニューポートコミュニティ  
 ニューポートから招いたAETと市民の交流の場。

日米の歴史を展示する日米外交歴史博物館  
 開港の歴史と共に、下田市から始まったアメリカとの外交の様子というの一種の国際交流である。その歴史を知ることによって現在の交流に対しての考え方を学ぶ。

歩行者ネットワークのための遊覧船発着所機能  
 黒船をイメージした遊覧船サスケハナが下田湾内を運行している。現在はアトリエとして見物している。コミュニティに発着所ができることによって市内が活性化するための歩行者ネットワークが出来上がる。

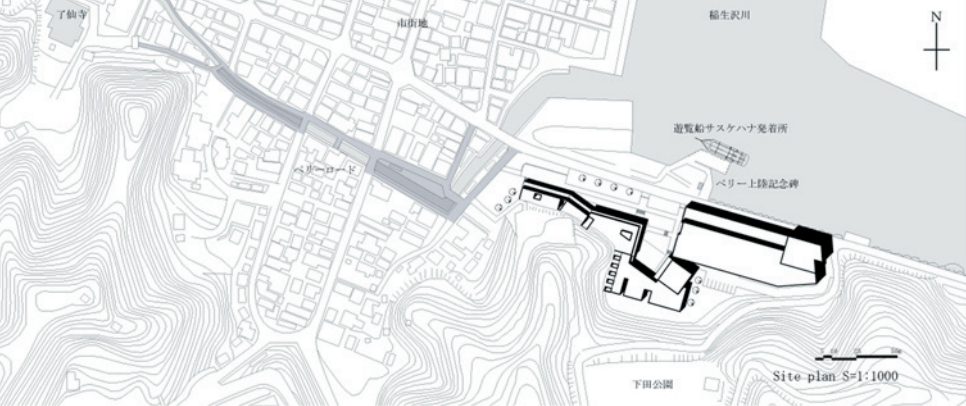


## 平面配置計画

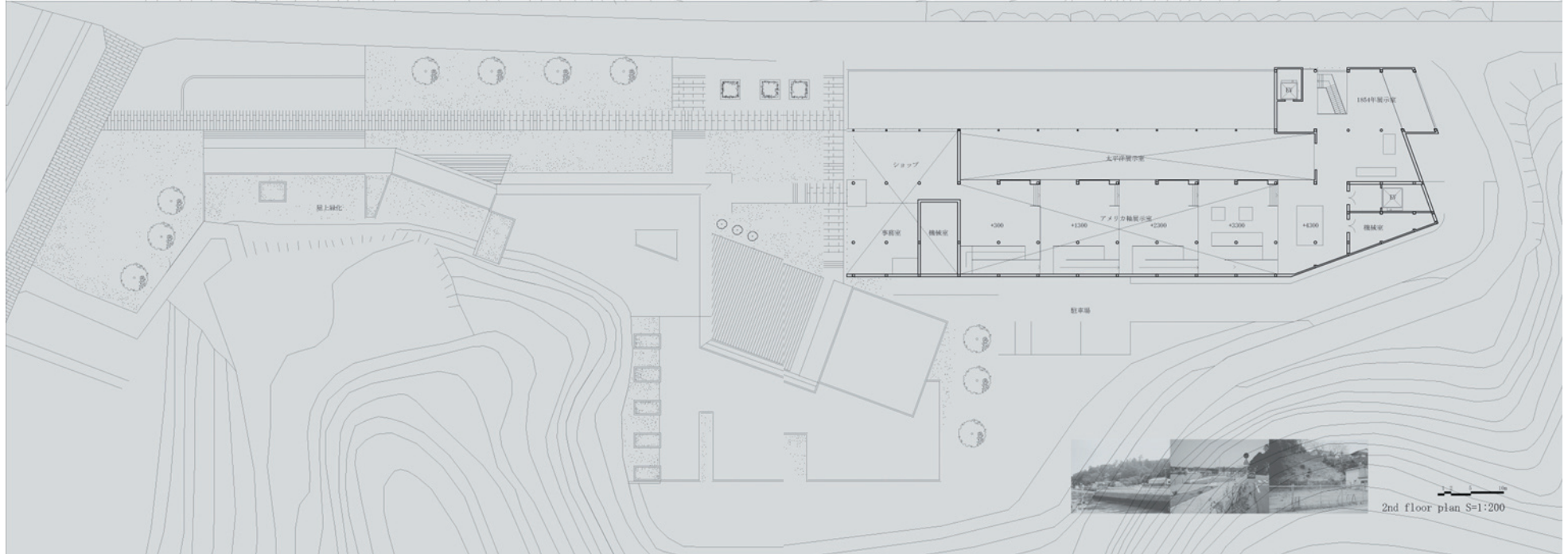
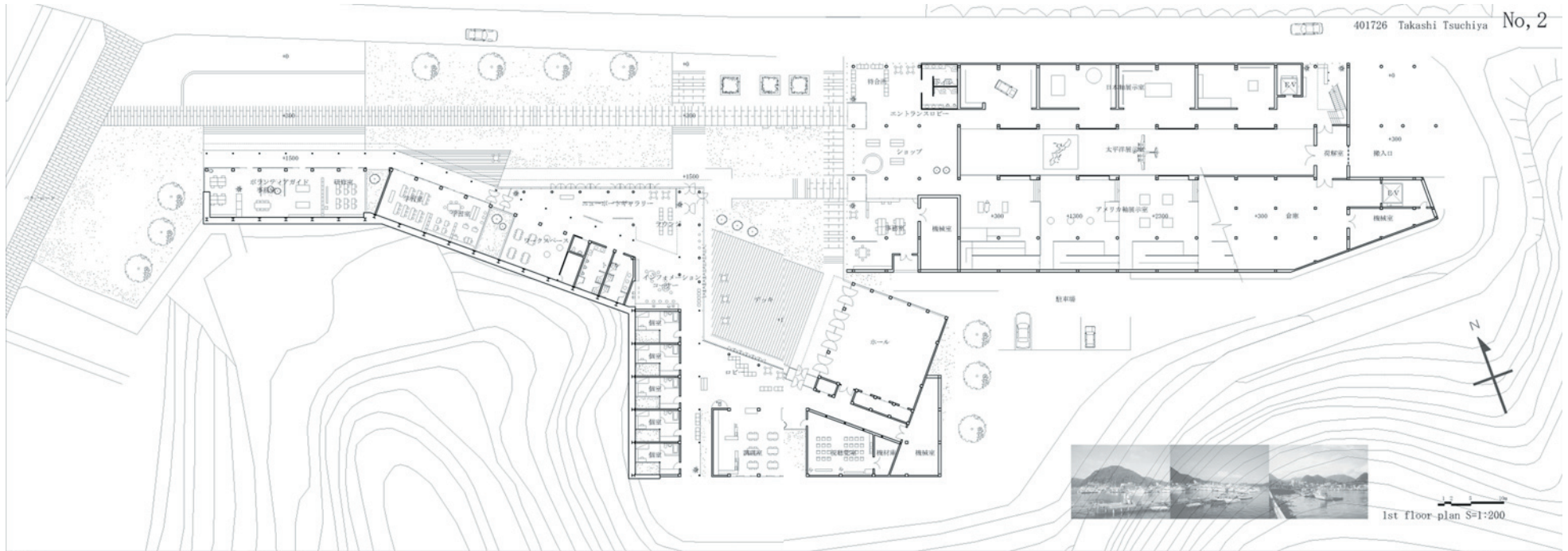


## 敷地

敷地は、下田市街地の南側に位置して、幕末にペリー艦隊が来航した時にそこから上陸したとされる記念碑がある場所である。了仙寺からペリーロードを通り、海へと抜ける歴史的な軸が存在する。南側には下田公園があり、開港記念碑が建てられている。



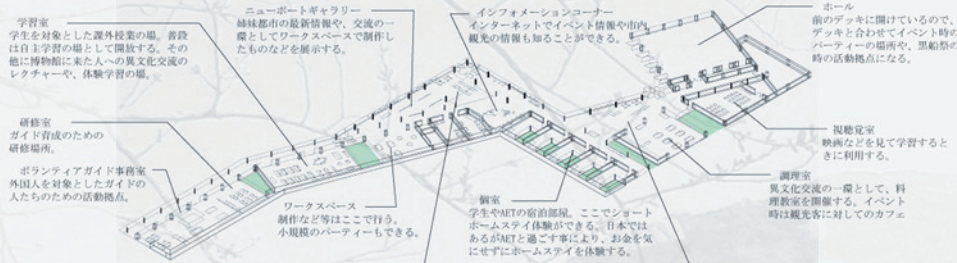






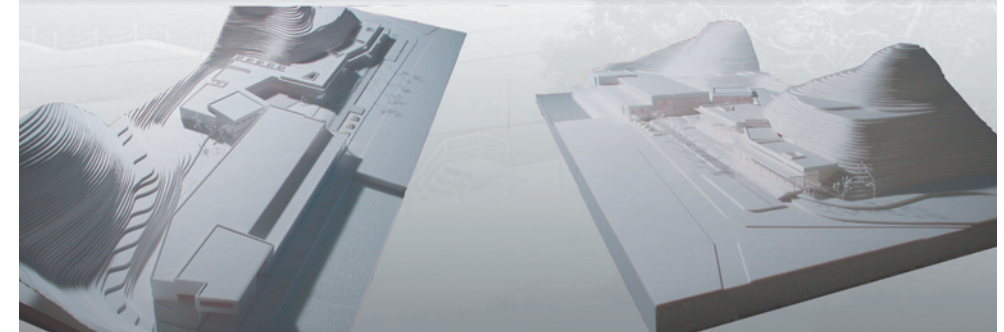
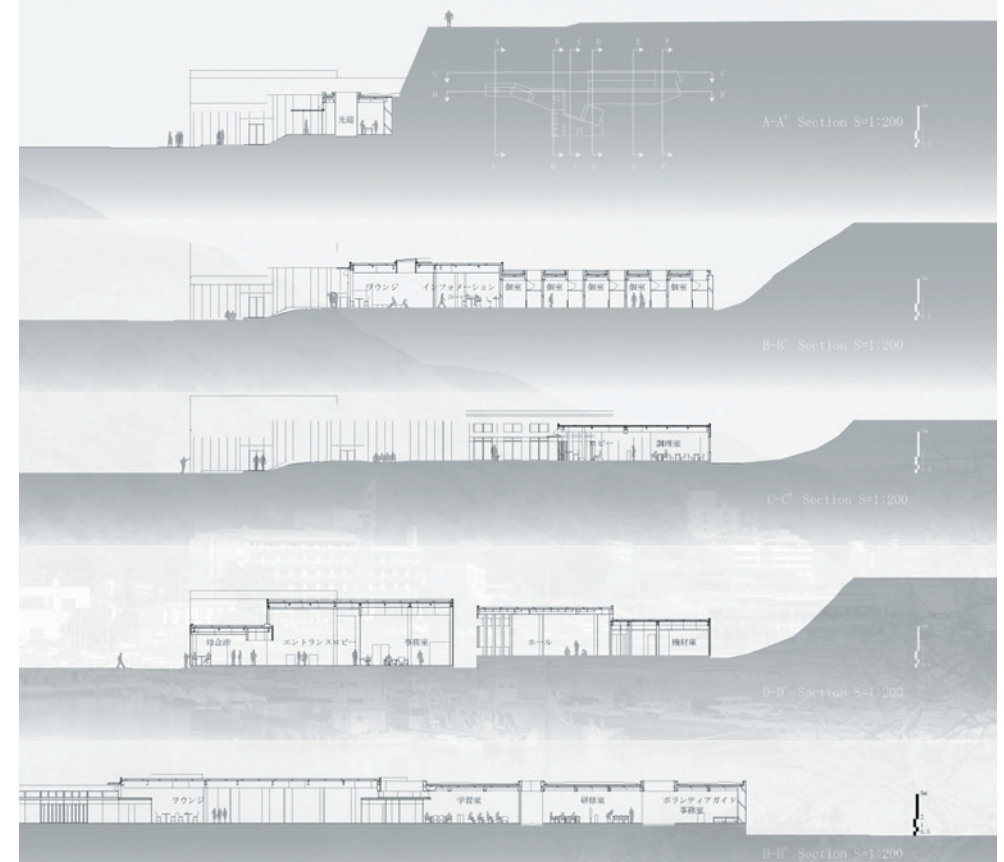
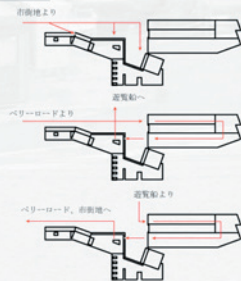
## ニューポートコミュニティ

下田での異文化交流を考える上で、AETに注目した。AETは学生を対象として、学校などでネイティブなコミュニケーション教育をするために日本に滞在している先生である。そのAETをニューポートから招き、下田の町に滞在してもらう。そして、コミュニティで市民との異文化交流を行う。  
姉妹都市からの招待ということで、お互いの友好関係や、交流の意識も高くなっていく。



## アプローチ

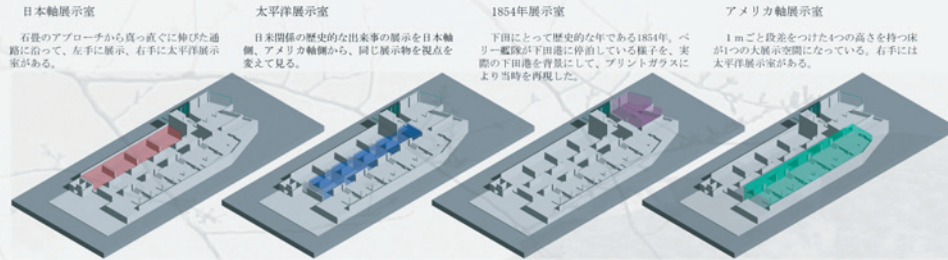
- ① 市民  
コミュニティを利用するために市街地方向から。
  - ② 観光客  
ペリーロードからそのまま石畳のアプローチに沿って博物館へ。そして、コミュニティのラウンジを経て遊覧船へ。
- 遊覧船から来た場合は博物館、コミュニティを経てからペリーロード、市街地へ。



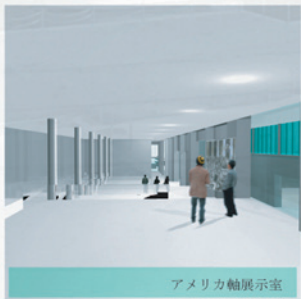
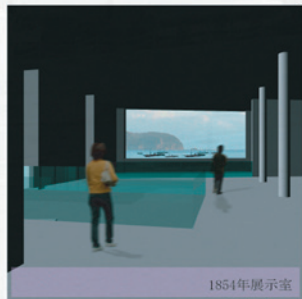
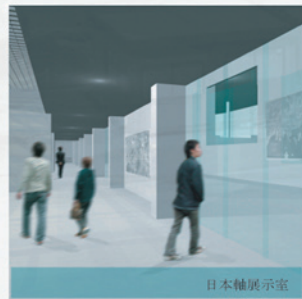
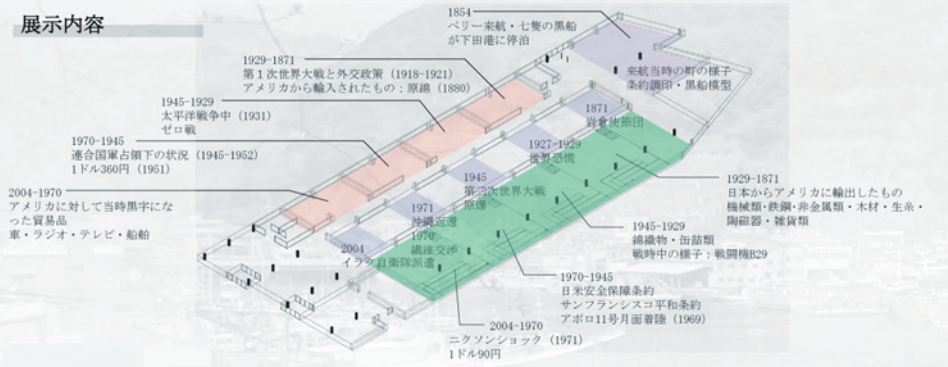


## 日米外交歴史博物館

ここでは、ペリーが下田に來航し、開港をした1854年から、現在2004年までの150年間の日米関係を見せる。展示は中央の太平洋展示室をはさんで、日本軸とアメリカ軸に分け、視点をえて日米関係の歴史を知ることができるものとなっている。

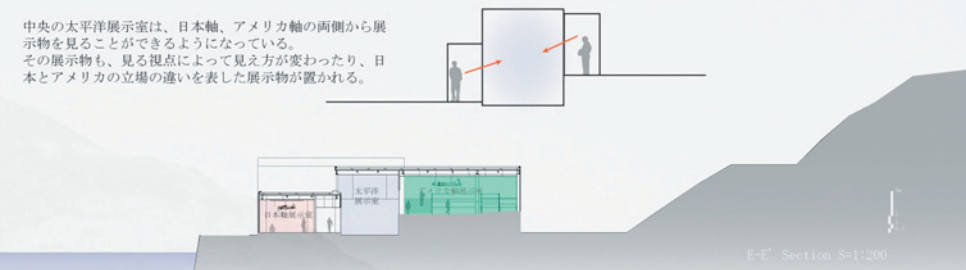


## 展示内容



## 展示方法

中央の太平洋展示室は、日本軸、アメリカ軸の両側から展示物を見ることができるようになっている。その展示物も、見る視点によって見え方が変わったり、日本とアメリカの立場の違いを表した展示物が置かれる。



1854年展示室では建物から海に向かって開口部を空けることで海を背景として取り入れている。そこに、当時の黒船来航の様子を表したプリントガラスを置くことで、それが大きなスクリーンとなる。



異文化交流の試みと観光産業の結びつきが強くなることで、下田の開港の歴史が受け継がれ、国際化時代への新たな発信となるだろう。少子高齢化の時代において、労働人口の不足による外国人受け入れ問題にしても、受け入れ体制の基盤作りなどが必要とされているという。異文化交流の考え方を考える意味でも、小さなことから試みが大切なのではないだろうか。

